

農大だより十七号

発行：平成 27 年
3 月 12 日
栃木県農業大 学校
〒 321-3233
宇都宮市上籠谷町
1145-1
Tel：028-667-0711

永遠の農政課題「担い手の育成」

栃木県農業大 学校副校長兼教務部長

佐藤 文政



この一年間を振り返りますと、
本科学生、研修科研修生とも大きな事故も無く、平穩に過ごすことができました。

平成二十六年卒業を迎える本科二年生は五十六名ですが、即就農予定者二十一名（内、雇用就農八名）、先進農家等で研修後就農予定者二名、農業関係の団体、企業に就職予定者十四名で、これからの栃木県の農業振興に貢献されることを期待します（二月十二日現在）。本科一年生六十五名は、二月十日に退寮式を行い、一年間の寮生活に幕を閉じました。校内での農業実習、先進農家での研修など充実した一年間で、成長の跡がはつきりと見えます。

とちぎ農業未来塾の塾生も、一

月十七日（定年帰農コース、二十九名）と、三月五日（新規就農コース、五十七名）に閉講式を行いました。本校で培った即戦力を活かした農業経営を發展させていただきたいと思えます。また、今年度で6回目となる農業ビジネススクールも、三月三日に修了式（十五名）を行いました。今後、修了生には、先進的な農業経営者となり、栃木県の農業をリードしていただけるものと確信しております。

さて、昨年五月に県農政部経営技術課がまとめた新規就農者等に関する調査結果によれば、栃木県内の新規就農者は二百三十七名でしたが、そのうちの七十名近くを、本科卒業生と未来塾受講生で占め

ています。今までも、そしてこれからも、農業大 学校は、農業の担い手の育成のための本県唯一の農業者研修教育機関としての重要性が期待されます。

平成二十三年度に、時流に対応するため、六次産業化、地域農産物の高付加価値化等の教育強化を標榜し学科再編を行い、ようやく軌道に乗ってきたところであります。しかし、現在では、さらに、T P P への対応、エネルギー問題など農業分野に山積する課題に立ち向かえる能力を兼ね備えた人材育成が必要となっています。

「至誠にして動かざる者は未だこれあらざるなり」（松下村塾）という熱い思いも、「ならぬことはならぬ」（会津藩校日新館）という強い信念も、両方とも農業大 学校の先生には必要ですが、「過ちて改めざる、これを過ちという」（論語）ことを、念頭に置いて偏ることなく学生指導を行ってきたいと考えています。

今後とも、栃木県農業大 学校職員一丸となりまして、担い手の育成に取り組んで参りますので、どうぞ、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

関東ブロックプロジェクト発表会

平成二十六年度関東ブロック農業大 学校等業績発表会が、群馬県前橋市で一月二十二日から二十三日に開催され、本校から三名が参加しました。

プロジェクト発表の部に農業経営学科二年の野沢俊介君と、畜産経営学科二年の中田千晴さんが、熱心に取組んだ試験研究の成果を発表し、意見発表の部で園芸経営学科野菜専攻二年の石嶋崇志君が、生産者と消費者でつくる農業の想いを熱く発表しました。



卒業論文発表会

(本科2年生)

平成二十六年年度の卒業論文発表会が、平成二十七年一月三十日に開催され、本科各学科専攻代表者六名が研究結果の発表を行いました。

発表者は、極度に緊張することもなく堂々と発表し、発表後の質疑応答も活発に行われ、的確に回答していました。

発表後に佐藤副校長先生から「研究は、結果の良し悪しに一喜一憂するのではなく、なぜそのような結果になったのか、方法や条件など様々な観点からの考察が非常に重要」と講評を頂きました。発表者及び発表課題は、以下のとおりです。

① 農業経営学科
高林 翔平
『ネギの慣行栽培と板挟み栽培での生育・収量・品質の違い』

② 農業経営学科

野沢 俊介
『水稻「コシヒカリ」秋起こしでの耕起土塊の大きさ、栽植密度の違いによる生育・収量・品質に及ぼす影響』

③ 園芸経営学科野菜専攻

高林 航平
『トマト栽培における誘引方法の違いが生育・収量・品質に及ぼす影響』

④ 園芸経営学科野菜専攻

田島 ひかり
『いちご「とちおとめ」における土壌水分の違いが生育・収量・品質に及ぼす影響』

⑤ 園芸経営学科花き専攻

水上 穰里
『スプレーギクにおけるトレハロース及びクエン酸が生育に及ぼす影響』

⑥ 園芸経営学科果樹専攻

松本 高徳
『ブドウ「巨峰」におけるジベレリン処理法が作業の省力効果と果実品質に及ぼす影響』

⑦ 畜産経営学科

中田 千晴
『早期離乳が子牛の発育及び母牛の発情回帰に及ぼす影響』



2年生の進路状況

学科・専攻	学生数	就農予定					就職予定		進学その他
		即就農	研修後就農	雇用就農	うち内定	就職内定			
農業経営	22	3	2	0	1	1	16	11	3
園芸・野菜	17	10	7	1	2	2	7	7	0
園芸・花き	7	5	2	0	3	3	1	0	1
園芸・果樹	3	1	1	0	0	0	0	0	2
畜産経営	7	4	1	1	2	2	3	3	0
計	56	23	13	2	8	8	27	21	6
構成比	100%	41.1%					48.2%		10.7%

注)平成27年2月12日現在
就職内定率は、77.8% (雇用就農を含めると82.9%)

卒業予定学生五十六名、就農予定者は二十三名、就職予定者は二十七名、その他が六名となっています。また、就職内定者の内訳は、農業関連企業及び農協を含めた農業関連団体が十四名となっています。その他の中で、専修学校化されて初めて宇都宮大学三年に編入した学生が誕生しました。

二十六年年度卒業生の進路

先進的経営体実習（本科1年生）

－技術の向上と社会人としての自覚をめざして－

実践教育の一環として、実際の現場で学ぶ、先進的経営体実習が行われました。

期間は八月二十一日から九月三十日における二十七日間を基本に行われました。

実習は、各地域の農業振興事務所に受入先の選定を依頼し、それぞれの希望に沿った、地域の先進農家や農業法人等において行われました。

農大に入学して五か月、基礎的な実習を経た一年生が参加しました。

先進的な経営体における栽培技術や飼養管理技術の習得に加え、農業経営者として必要な経営理念や農業に対する思い等、多くを学び貴重な体験となりました。

改めて、受入先並びに関係機関の皆様にご礼申し上げます。

○農業経営学科（作物）

【上三川町耕種農家】



○農業経営学科（露地野菜）

【鹿沼市野菜農家】



○園芸経営学科（野菜専攻）

【栃木市トマト農家】



○園芸経営学科（花き専攻）

【大田原市花き農家】



○園芸経営学科（果樹専攻）

【下野市梨農家】



○畜産経営学科

【宇都宮市酪農家】



第38回農大祭

縁あってのこの命 自然の恵に感謝して ～ありがとう～

第三十八回農大祭が十一月二十二日～二十三日、農大キャンパスで、秋晴れの好天の下開催され、約五千人の来場者で賑わいました。

農大祭では、卒業論文、先進的経営体派遣実習、書道、フラワーアレンジメント、美術・写真サークル活動の展示がなされました。

自然の恵みである農大産・県内産農産物等の販売や、各種模擬店も出店しました。

イベントとしては、スタンプラリーや、寄せ植え体験、子牛ふれあい牧場などの他、小山北桜高校よさこいソーラン部、地元上籠谷お囃子会、未来塾OBのハワイアンの演奏、とちまるくんとのおふれあい農大祭を盛り上げてくれました。

また、二十一日夜は、中夜祭と称し、学生グループの催し物を楽しみました。



書道講座、美術・写真サークル展示



小山北桜高よさこいソーラン演舞



模擬店準備忙しい、頑張れ！



晴天のもと、賑わう農大祭！



本科学生や研修生が生産した農作物を学生が定期的に販売することで、地域の方に農大を理解してもらい、学生にはお客様への対応等マーケティングの勉強をしてもらおうと、「農大直売所」を開設しています。

基本的に毎週水曜日、午後二時から教育研修棟玄関で開設し、新鮮で美味しい野菜や果物、日持ちの良い草花は好評でした。

また、校外でも延べ十一回、「ララスク学園祭」等各種イベントに参加し農大をアピールしました。

農大直売所

―消費者とのふれあい―

キャンパスライフ

(平成26年7月～平成27年2月)

学生自治会役員選挙 行われる

七月十一日に自治会役員選挙が行われました。

次期会長には三名、次期副会長には四名の立候補があり、次のおり新役員が決まりました。

◎会長 渡辺 修平

(園芸経営学科野菜専攻)

◎副会長 上田 真哉

(園芸経営学科野菜専攻)

○副会長 坂本 一司

(農業経営学科)

秋季校内スポーツ大会 & 収穫祭

秋季校内スポーツ大会と収穫祭が十月三十一日、晴天のもと開催されました。

前回は農業経営学科と畜産経営学科の混成グループと園芸経営学科グループの団体戦でしたが、今回は学科毎に分かれ農業経営二チーム、園芸経営学科三チーム、畜産経



営学科一チーム、計六チームで競り合う戦いとなりました。各種目ごとの成績ではバスケットボールは園芸Cチーム、卓球、ドッジボールは農経A、バドミントンは園芸A、綱引き、クロスカントリリーレーを畜産チームがそれぞれ一位を獲得し、総合優勝は農経Aチームでした。畜産チームは十四名と人数が少ないながらも奮闘し準優勝、三位は園芸Cチームでした。昼食には収穫祭が行われました。本校農場で収穫された食材をふんだんに使い学生自ら作った豚汁や弁当が用意され、収穫の喜びをかみしめました。

学校法人三友学園と連携協定を締結しました



本校は、平成二十六年十一月十三日、食の専門家の育成を目指す「学校法人三友学園」と連携協定を締結いたしました。

協定締結の目的は、相互に教育・研修の連携強化や学生の交流を促進すること、学生等の資質向上を図ることです。

本協定の締結により、農大による講義や農業体験、三友学園による講義や実習等について相互に受入を行うほか、学校祭・学園祭へ相互に参加するなど、学生の交流を行います。

農機メーカーとの連携協定を締結

一月二十八日、農大、全農とちぎ及び農機メーカー(クボタアグリサービス、ヤンマーアグリジャパン、キセキ関東、三菱農機販売)間で「農業機械教育・研修の連携に関する協定」を締結しました。

最先端高性能農業機械の操作実習を行うなど、実践教育の強化により、今後さらに高い即戦力を有する人材を育成して参ります。

全国農大等プロジェクト発表会

平成二十七年二月十二日～十三日の二日間、国立オリンピック記念青少年総合センターで全国農大等プロジェクト発表会・意見発表会が開催されました。発表会では、各プロジェクトから選ばれた十五名がプロジェクト(養成課程)発表を、十名が意見発表を行いました。

夕食時には交換会が催され、本県からは三名が参加し、全国のこれからの農業を担う学生等と交流を深めました。

研修部門の紹介

就農準備校 「とちぎ農業 未来塾」

四月に開講した「とちぎ農業未来塾」は九十三名でスタートしました。各種作物の栽培の基礎やそれぞれの専門の品目についての栽培技術等を学びました。農大祭では、ねぎやはくさい、いちごなど研修生が栽培した野菜類を販売し、来場者から好評を得ました。



また、先日は平成二十七年年度研修生の募集が締め切られ、百二十一名の方から申し込みをいただきました。

食と農の起業家養成 研修

十一月から開講した「食と農の起業家養成研修」は、四回の講座合計で百三十三名（延べ）でスタートしました。

農村起業活動に係る知識・心構え、米粉を活用した食品加工の基礎技術や商品設計、食品衛生関係の法規などを学びました。



とちぎ農業ビジネス スクール



七月から開講した「とちぎ農業ビジネススクール」は、県内各地から選ばれた二十三名の研修生でスタートしました。

経営戦略やマーケティング、雇用管理と人材育成、財務管理などを学んだほか、農業経営者としての人間力、発想力などについて演習を交えて学びました。研修のまとめとして、各自の「経営改革プラン」を策定しました。今後はこのプランを実現しつつ、各地域の経営モデルとなり、本県農業のけん引役となるものと期待されます。

平成二十七年年度農業機械研修計画について

- 農業機械士養成研修（前期）
 - ① 九月二十九日～十月十五日
 - ② 十月三十日～十一月十九日
 - ③ 二月二日～二月十八日
 - 農業機械士養成研修（後期）
 - ① 十一月二十五日～十二月三日
 - ② 十二月九日～十二月十七日
 - ③ 一月十三日～一月二十一日
- 詳細は農業機械研修計画またはホームページをご覧ください。
☆ヤンマーアグリジャパン（株）関東甲信越カンパニーの御厚意により、運転練習用に、最新のトラクターが入りました。

